

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑪③

入江内湖干拓と磯崎文五郎さん

―琵琶湖干拓資料館の展示品―

内湖とはなにか

かつて米原駅の南西には入江内湖が広がっていました。おおよそ下向きの三角形に近い形状をしていて、面積は三三〇ヘクタール、周囲約八キロ、水深は〇・六〜一・八メートルと、内湖としては大中の湖に次ぐ広さをもっていました。琵琶湖とは、その南西に位置する磯山から北北東に延びた長さ約二キロの砂堆によって隔てられ、その付け根に磯の集落があります。「内湖」とは、琵琶湖の湖岸が川から運ばれた土砂によって入口がふさがれて、半ば独立した沼沢地になったもので、琵琶湖独特の呼び名です。その姿は、地形学でいわれる「潟湖」や「ラグーン」と呼ばれるものと同じです。

豊富な水産資源をもった入江内湖は、古来から良好な漁業の場として利用されてきました。しかし、第二次世界大戦末期に食糧難に陥ったことで農地開発の機運が高まると、琵琶湖干拓事業の一環として、入江内

湖の干拓が昭和一九年から二五年にかけて実施されました。

干拓にかよい歴史を探究

昭和一九年に干拓がはじまり、広大な湖面が露出すると、全域から土器などの大量の遺物が出てきました。しかし、戦中のことであり考古学への関心は薄く、昭和二四年に小江慶雄氏（京都学芸大学）が南西部の小区画を試掘したのにとどまりました。しかし、磯崎文五郎氏は陸地化する過程で熱心に遺物を採集し、その多くは琵琶湖干拓資料館に展示されています。磯崎氏は、入江村磯（現米原市磯）に生まれ、小学校を卒業すると家業の農業に従事しました。当時、学校で教える古代史は神話に基づいたものでしたが、磯崎氏は独学で考古学を勉強し、二〇代の頃から遺物を拾い集めて、遺跡を調べ歩きました。

磯崎氏の調査によると、遺物の分布状況は、西野、明神、丸葭、善積の各地区の全域に及んでいました。磯崎氏が採集した資料から、縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡があったことがわかりました。拾い集められた遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石斧、古銭、土鍾、木製の弓など百余点にのぼります。各時代の特徴的なものとして、縄文時代は早期の尖底土器のほか、石棒、凹石、磨石、石鏃や骨角器の鉋があります。弥生時代は後期の土器片のほか、鹿角製戈、四角と鹿角製又鋏一点があります。なかでも弥生時代の鹿角製品は注目されました。全長約二三・六センチ、鋭利な刃がついており、武器の戈か小刀ではないかと考えられました。古墳時代で注目されるのは韓国慶尚南道金海郡や釜山市出土のものに類似する伽耶系土器の蓋と長頸壺です。古代は平安時代後期の灰釉陶器が多く、「錦谷」「束」などと書かれた墨書土器がありますが、これ以降の時代



の出土品は皆無で、内湖が広がるなど、遺跡と内湖に大きな変化があったと考えられています。これらの資料の多くが琵琶湖干拓資料館の二階展示室に展示公開されています。

（歴史文化財保護課）

琵琶湖干拓資料館

米原市入江五三二一三

休館 土日、祝日、年末年始
入館 無料

